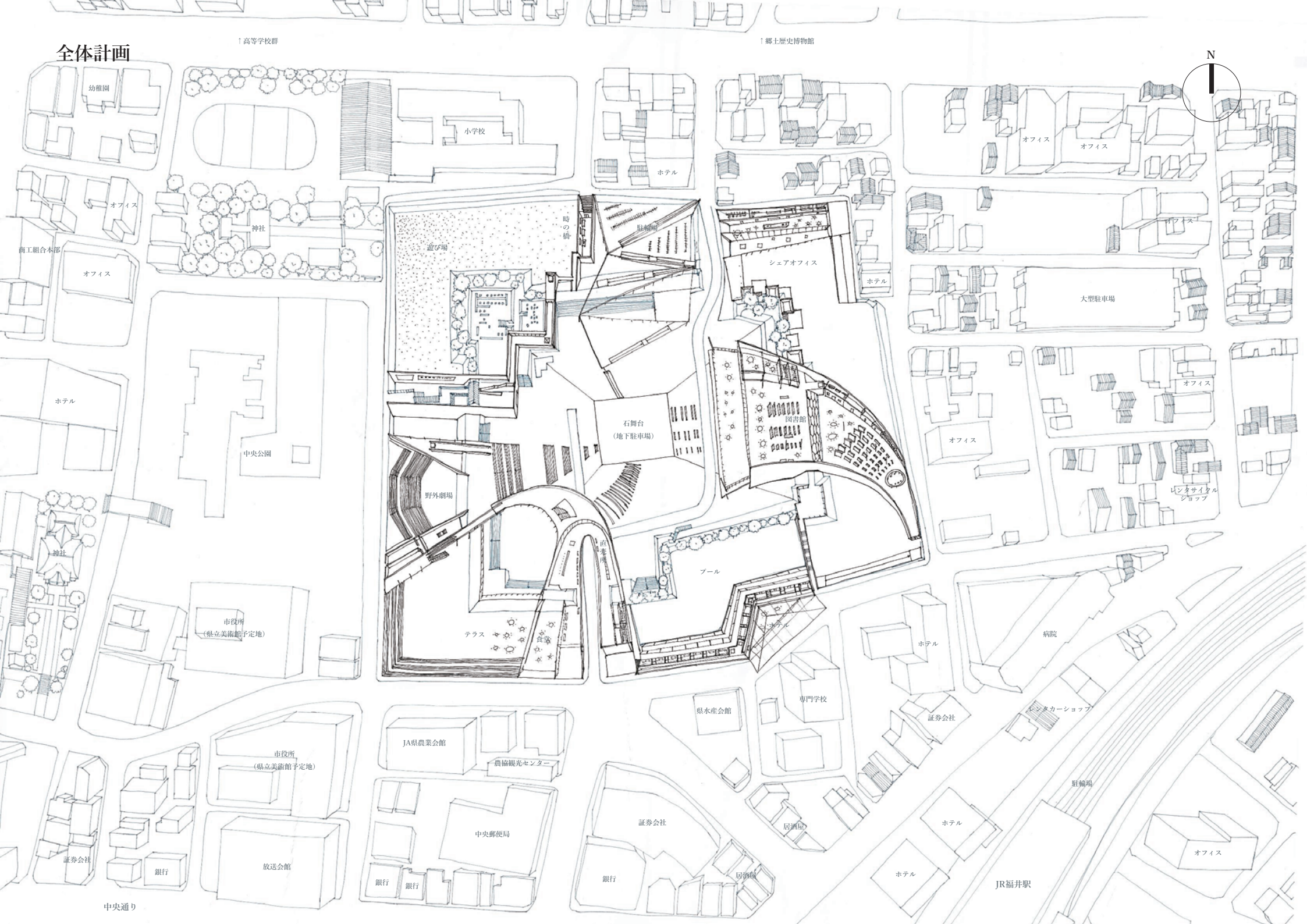
全体計画

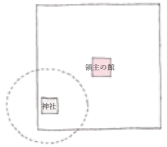

↑高等学校群
↑郷土歴史博物館
N
幼稚園
小学校
ホテル
オフィス
オフィス
オフィス
オフィス
神社
商工組合本部
オフィス
遊び場
時の橋
駐輪場
シェアオフィス
ホテル
大型駐車場
ホテル
中央公園
石舞台
（地下駐車場）
図書館
オフィス
オフィス
レンタサイタル
ショップ
野外劇場
直売所
プール
神社
市役所
（県立美術館予定地）
テラス
食堂
ホテル
ホテル
病院
専門学校
県水産会館
証券会社
レンタカーショップ
JA県農業会館
農協観光センター
市役所
（県立美術館予定地）
駐輪場
証券会社
中央郵便局
居酒屋
ホテル
オフィス
証券会社
銀行
放送会館
銀行
銀行
銀行
居酒屋
ホテル
JR福井駅
中央通り

■日本における中心の変遷

古代

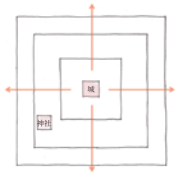
無秩序に発生していた集落が、宗教建築の周りに集まった。

中世



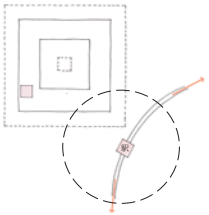
政教分離によって、土地を守る領主の館が中心となった。
その際、既存の聖地を内包する形で威厳を保つことが多かった。

近世



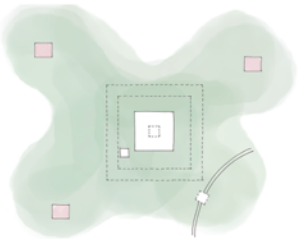
守るものから治めるものへと変わった都市に、
領主の力を拡散するように城郭が生まれた。

近代



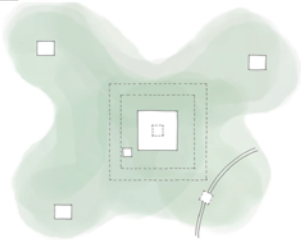
日本がひとつになり、国全体に引かれた線路によって
駅が各場所の中心となった。

現代



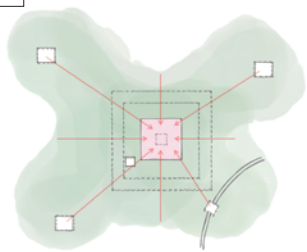
郊外の広い土地に大型商業施設や公共施設ができる。

現在



スプロールし、中心を消失した都市

未来



広がりきった都市を再び中心へと収束させる。

■輪郭線を中心点に

都市の骨格として残っている堀を一体化し、ひとつにする。
輪郭線だった堀が中心点となり、都市の中心としての機能を取り戻す。

■堀の建築化

堀の水を抜いて、建築化していく。

水堀と、石垣によって、住民と都市の中心が隔てられている。

堀の水を抜くことで、だれのものでもない場所が生まれる。

建築が石垣を内包するように建ち上がる。
建築によって城内へのアクセスが生まれ、中心で混じり合う。

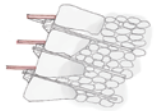
■「鑑賞物」となっている保存

初期の状態に戻された建築は、誰も使用することができなくなる。
建築が「鑑賞物」となり、「見ている」人は、見物人になってしまう。

■石垣を支える建築

石垣を補強しながら石垣と人間の関係をつくり出す建築。
補強の必要がない箇所は、可逆性を考えて設計する。

はらみに合わせて配置

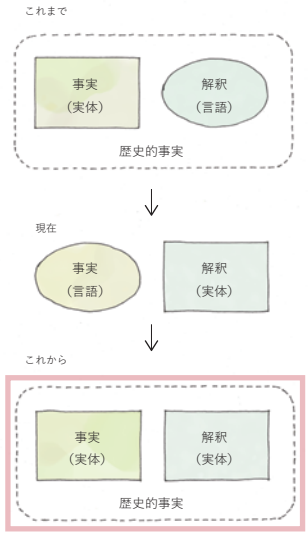


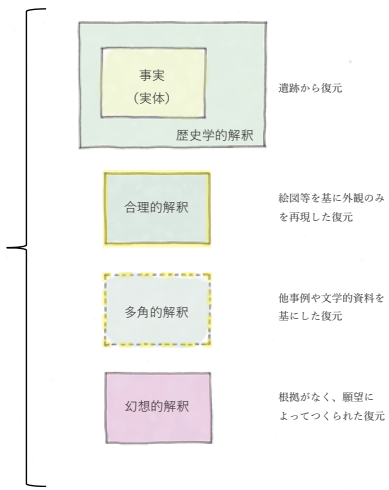
石垣を基盤に建築を構成し、補強する。

階段等の架構を交差させ、筋交いの役割を果たす。

■事実を解釈する建築

歴史的事実は「事実」と「解釈」が対になることで成立する。
実体のある事実と同じヒエラルキーを持って存在できる、実体のある解釈を設計する。

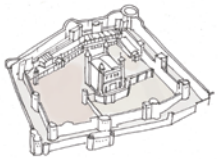


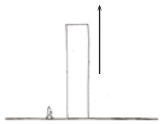


■中心の建築

外国で教会や城というと、豪華で特別な、塔のような建築が思い浮かべられる。
一方、日本では神社も城も、住宅の形式と似た建築が水平に増殖したものであった。

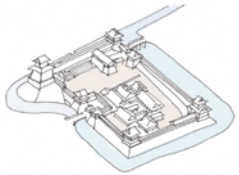
垂直にそびえる欧州の中心

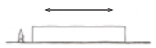




超越
肉体との分離
反抗，高揚
天に向かう方向性

水平に広がる日本の中心





内在
肉体との同一化
受容，休息
自由な方向性

根付かない天守閣

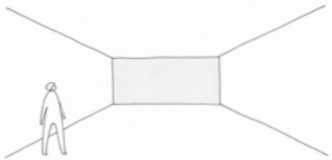
織田信長によって生まれた天守閣は、「見ること」「見られること」
を意識した垂直性のある建物だった。
しかし、戦以外では物置等に使用され、空き家同然だったため、江
戸時代に入ると次第につくられなくなった。

プランニング重視のなわばり

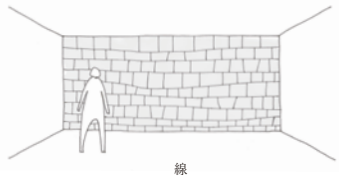
弥生時代の環濠集落や、大和時代の豪族の館などに見られるように、
日本では遥か昔から、「くるわ」を掘ることで、
特別な場所、護るべき場所をかたちづくってきた。

■石垣と人間の関係性

人間と石垣の距離感を操作し、石垣のある空間体験にグラデーションを生む。



面
土木的



線
建築的

物質
インテリア的

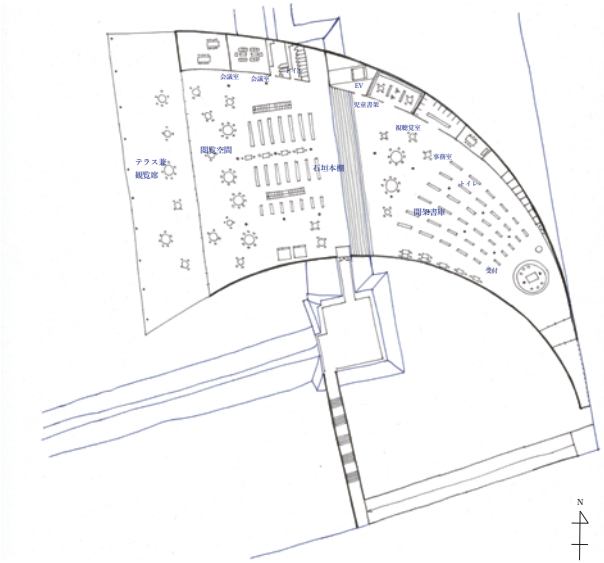
遠

近

■石垣の解釈を付与する建築

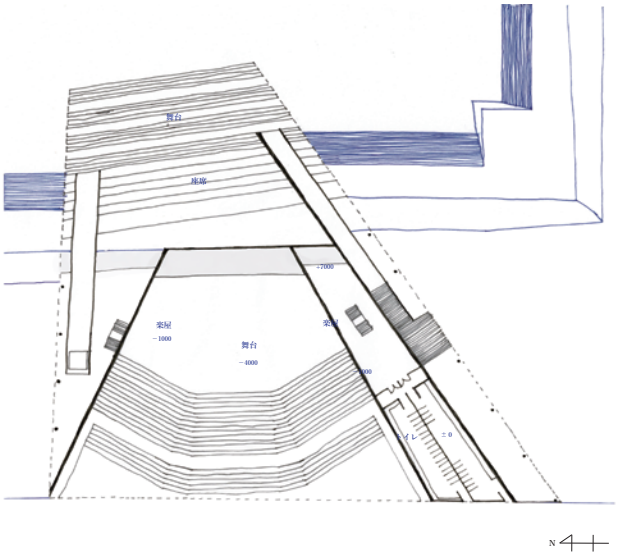
図書館 × 拡張型

身体スケールから石垣スケールへと拡張していく図書館は、石垣を一層大きなものに見せる。
石垣を補強している本棚は「もたれ擁壁」として石垣を支えつつ石垣のラインを可視化させ、近づくと、石一つ一つと出会う場となる。



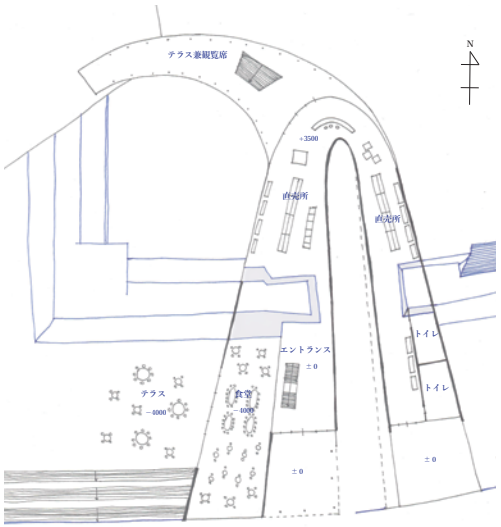
野外劇場 × 集中型

石垣に向かって一点集中させる野外劇場では、石垣が舞台で繰り広げられる様々な演目の背景として、多くの人の心に残る。
屋根はゆるやかな階段となって堀の内部へと落ちる。堀内部からは屋根が座席として使われる。



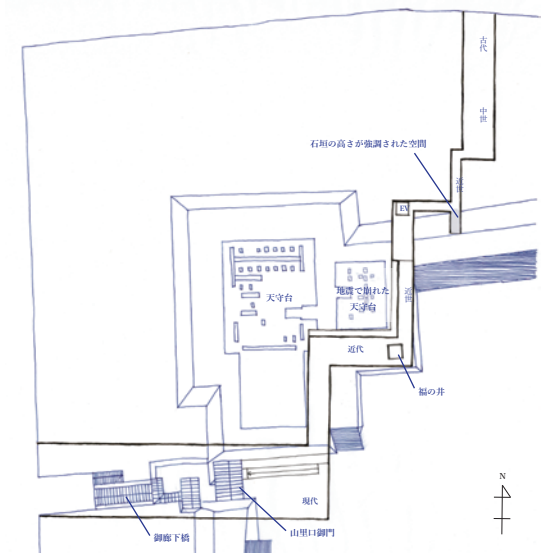
直売所・食堂 × 介入型

そばに立っている農協本部と水産会館の直売所を合体させる。
駅から続く大きな動線を城内に引き込むような形状で、かつて正門が建っていた堀を内部に取り込む。
堀によって規定された空間は、直売所と、直売所の食材を用いた食堂に分かれる。



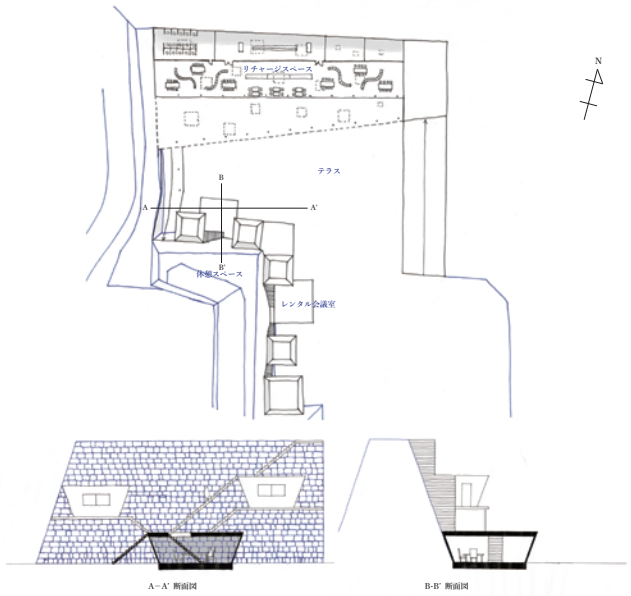
時の橋 × 強調型

歴史博物館と中央公園をつなぐ橋は、この土地の歴史展示室としての役割を果たす。
古代・中世の展示に続き、城の建った近世の展示空間では、極端に細い空間で石垣の「高さ」を強く感じる。



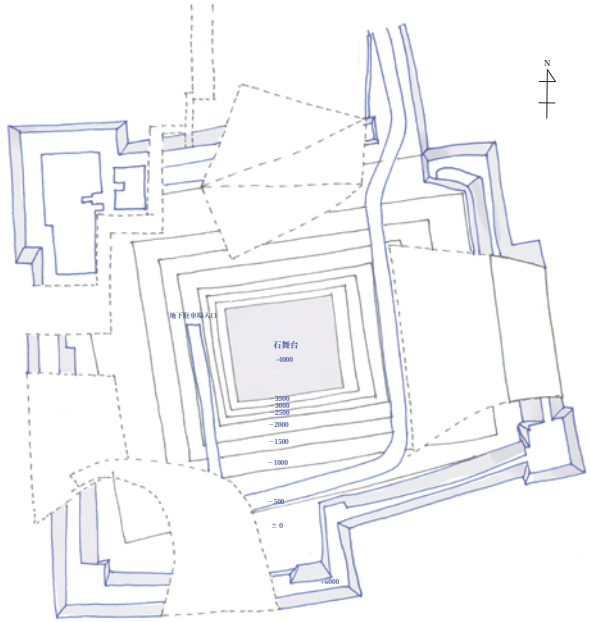
シェアオフィス × 一体型

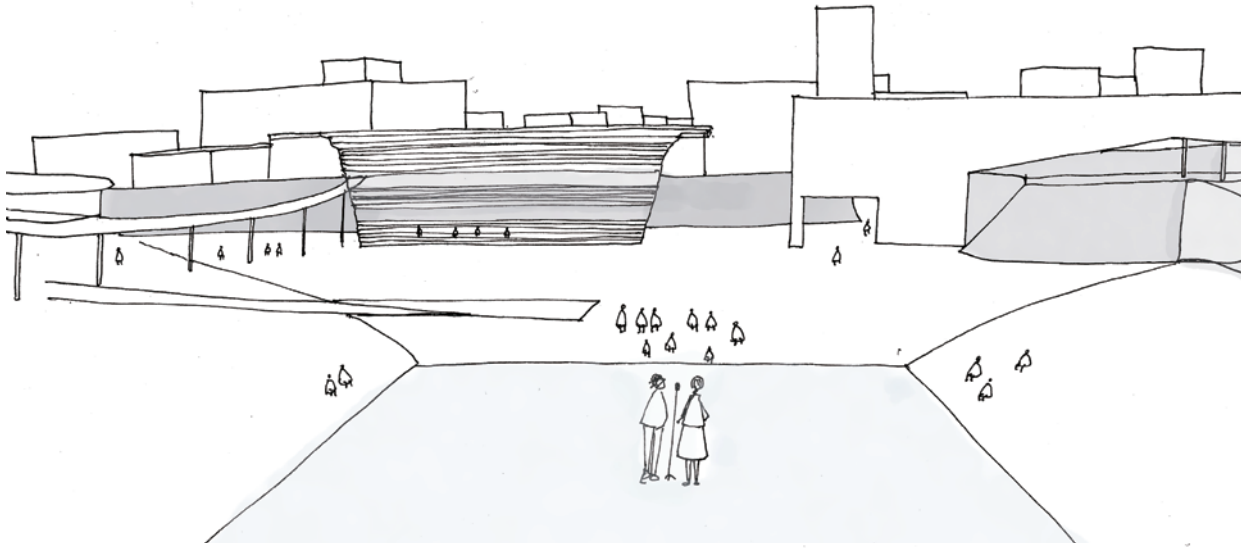
大きなスロープの下にはシェアできるリチャージスペースがあり、石垣が続くスロープを辿ると、個室がある。
個室は、石垣の勾配を用いた、石垣と一体化する空間であり、切り取られる場所によって様々な表情を持つ石垣が、
空間を特徴付ける。

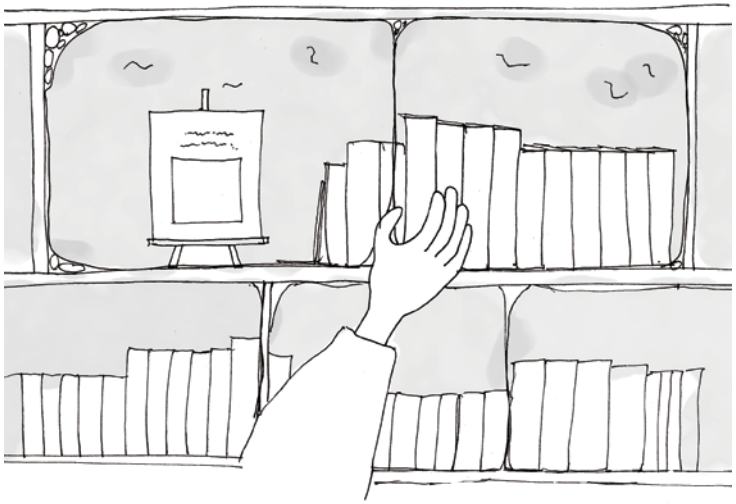


石舞台 × 陥没型

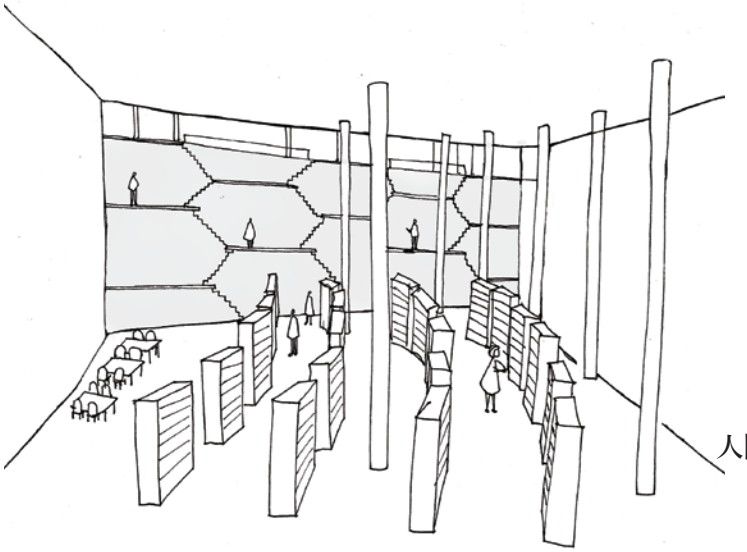
堀の内部は、県庁の地下駐車場と道路を残しながら、地下１階分地面を下げることで、ゆるやかでおおらかな舞台へと変化する。
県庁の地下１階部分のスラブだった場所に、石垣に用いられている「勿谷石」を葺くことで、舞台とする。

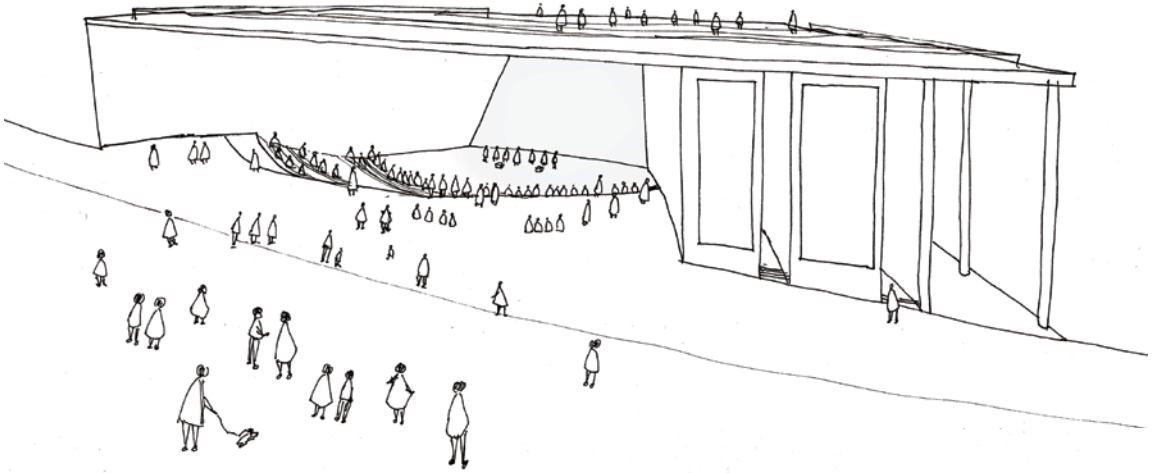
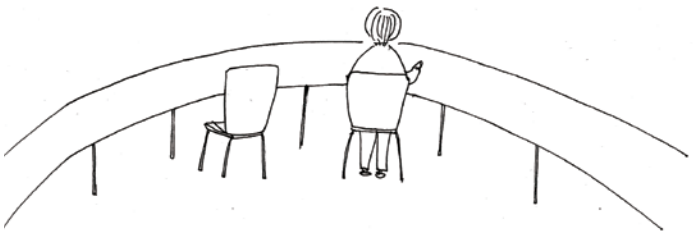
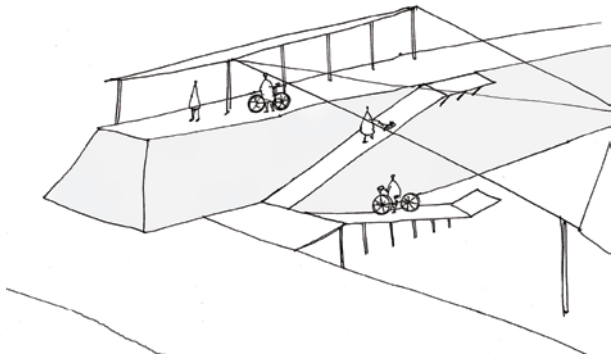
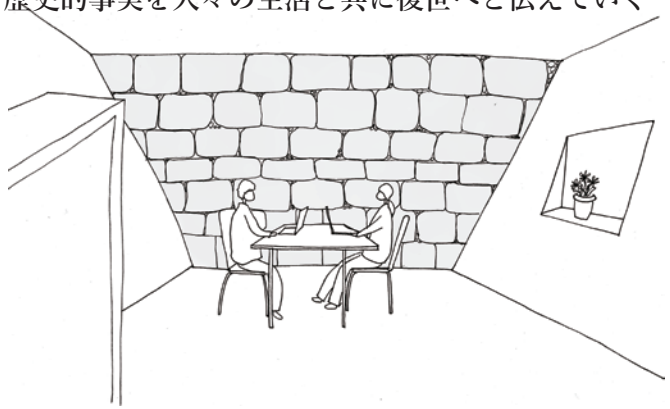






石垣と様々な関係をつくる建築で生まれた個人の経験は、堀という大きな骨格で建築がひとつになるように、いつしか都市全体の共通の記憶となる





人間の造り出した大地を基盤とした建築が、堀という歴史的事実を人々の生活と共に後世へと伝えていく